

分娩柵利用による新生子豚の損耗防止に関する 試験 第2報

加藤己之吉 大橋昭也

1. 目的

繁殖豚の多頭飼育経営を行なうために必要な分娩管理の省力化の一つである分娩柵利用による子豚損耗防止効果について第1報で述べたが、更に省力化を進めるために無看護による損耗について看護分娩との比較を調査する目的をもつて、本試験を実施した。

2. 試験材料および方法

(1) 供試豚

当场繁殖の大ヨークシャー種、ランドレース

種、ハンプシャー種、中ヨークシャー種について調査研究した。

(2) 試験期間

昭和45年4月より、昭和46年3月末までの一年間に分娩した種雌豚について行なつた。

(3) 分娩管理の方法

分娩前10日前後に、母豚を分娩豚舎に収容し、分娩1～2日前に縦型分娩柵を設置し、看護もしくは放任分娩を行なつた。

3. 分娩柵使用の看護豚、無看護豚の圧死調査成績。

表-1 看護区、無看護区の成績

調査項目	看護区					無看護区				
	ハンプシャー	中ヨークシャー	大ヨークシャー	ランドレース	合計	ハンプシャー	中ヨークシャー	大ヨークシャー	ランドレース	合計
供試腹数	1腹	5腹	5腹	19腹	30腹	1腹	—	4腹	9腹	14腹
哺育開始頭数	9頭	38頭	44頭	180頭	271頭	6頭	—	39頭	83頭	128頭
一腹平均頭数	9	7.6"	8.8"	9.5"	9.3"	6"	—	9.8"	9.2"	9.1"
圧死頭数	1"	1	1"	1"	4"	0	—	0	3"	3"
圧死率	11.1%	2.6%	2.3%	0.6%	1.5%	0	—	0	8.3%	2.3%

表-2 品種別生後日令による圧死数

週別圧死 試供試 豚品名	看 護 区					無 看 護 区				
	1~7日	8~14	15~21		合 計	1~7日	8~14	15~21		合 計
中ヨークシャー	1頭	—	—	—	1頭	—	—	—	—	—
大ヨークシャー	—	1頭	—	—	1頭	—	—	—	—	—
ランドレース	1頭	—	—	—	1頭	1頭	1頭	1頭	—	3頭
ハンブシャー	1頭	—	—	—	1頭	—	—	—	—	—

表-3 生後日令による圧死率

週別圧死 調査 項目	看 護 区				無 看 護 区			
	1~7	8~14	15~21	計	1~7	8~14	15~21	計
日令別圧死数	3	1	0	4	1	1	1	3
日令別圧死率	75%	25%	0	100%	33.3%	33.3%	33.3%	99.9%

表-4 死産発生率の比較

供試豚 品 種	看 護 区					無 看 護 区				
	ハンブ シャー	中ヨーク シャー	大ヨーク シャー	ランド レース	合 計	ハンブ シャー	中ヨーク シャー	大ヨーク シャー	ランド レース	合 計
分 娩 数	12頭	47頭	74頭	207頭	340頭	6頭	—	44頭	107頭	157頭
死産発生数	0	7	6	20	33	0	—	2	22	24
死産発生率	0	14.9	8.1	9.7	9.7	0	—	5.5	20.6	15.3

4. 考察

(1) 圧死発生率は、表一に示すとおり看護区
の圧死率1.5%に比較し、無看護区の2.3%と、
無看護区が多くなっているが、第1報の分娩
柵使用看護区の3.17%柵を使用せずに看護
分娩を行なっていた場合の4.57%と比べて、
無看護分娩も良く看護分娩とともに前年度よ
りも良好な結果を得た。

(2) 生後日令による圧死数とその発生率は表2
および3に示すとおりであり、分娩柵を使用し
ている7日間に発生した圧死は看護区が多く、
無看護による圧死数の増加は認められなかつた。
また第1報と比較した場合の日令別圧死率は看
護分娩区において、同じ傾向を示している。

(3) 無看護分娩で重要な問題点となる死産の発
生数は、表4に示すとおり、無看護区に多いが、
これはたまたま、日中に分娩したランドレー
ス種に、胎内で死亡していた。新生児が一腹
で8頭発生したために高率となつたものであり、
一般的な傾向としては認められない。

5. 要約

分娩管理の省力化を更に進めて、新生子豚の損
耗防止を計り、多頭管理を要易にするために必要
な分娩柵使用による看護分娩の実用性を検討し
たところ、無看護区の圧死率がやゝ高かつたが、
昨年実施した分娩柵使用看護区の3.17%に比べ
ると低く、実用性が認められた。